

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18520348

研究課題名（和文） 小林好日を通して見た近代日本語学確立期の学史的 research

研究課題名（英文） Research on the Establishment of Modern Japanese Linguistics:
An Analysis on the Research Materials of Yoshiharu Kobayashi

研究代表者

齋藤 倫明 (SAITO MICHIAKI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20178510

研究成果の概要：

本研究は、近代日本語学確立期における研究者小林好日の位置づけを行うことにより、近代日本語学がいかに確立されたのかの一端を明らかにするものである。小林の残した原稿・ノート類及び方言調査資料の整理・分析を進め、学史的 position を行った。小林の文法研究は同時代の保科孝一・吉岡郷甫から影響を受けていた。また、日本語史研究が通史研究となるための一端を担う文法史研究を進めた。さらに、方言研究では西洋方言学を十分に消化しそれを日本語方言に適用し、言語変化の理論面に大きな貢献を果した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	570,000	3,870,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：日本語学史

1. 研究開始当初の背景

日本語学史研究は、これまで近代以前の江戸時代の国学者の言語研究を中心におこなわれてきたが、今ある日本語研究がいかなるもので、なぜこのようにあるのか、ということを考えるためには、近代に生まれた西洋言語学の影響を受けながら展開した日本語研究について検討していく必要がある。しかしながら、近代日本語研究の展開については、これまで十分な蓄積が日本語学界にあると

はいえない。

また、従来の近代における日本語研究の学史的 research は、その後の日本語研究の体系に極めて大きな影響を与えた研究者の事跡を検討することが多かった。確かに、それらの人々によって日本語研究が大きく進展していったという側面はあるものの、それは、日本語研究の転換点をとらえるに過ぎない。徐々に展開していく日本語研究の姿を明らかにするためには、むしろ、その他の一般的な日本語学者について、その研究者がどのよ

うな研究をおこなっていったか、またそれがどのような意味をもつのかということを考えることが必要であるといえる。

近代における日本語研究の学史的な研究はこれまであまりおこなわれてきてはいない。近代日本語学史の成果が比較的示されるものは福井久蔵『国語学史』(厚生閣)1942等にかぎられ、近代日本語研究の流れが概略的に示されるものとしては時枝誠記『現代の国語学』(有精堂)1956、東条操『国語学新講』(筑摩書房)1965等にかぎられる。日本語研究のパラダイムを左右した学者の研究は、例えば上田万年については清水康行の一連の研究があり、また、橋本進吉については、近年ではとくに、上代特殊仮名遣の研究に関して、安田尚道の一連の研究がある。時枝誠記については根来司『時枝誠記研究一言語過程説一』(明治書院)1985等がある。それ以外の学者については、イ・ヨンスク『「国語」という思想』(岩波書店)1996が保科孝一をとりあげるが、確立期の日本語研究者については、ほとんど言及がないというのが現状である。近代における日本語研究史では、文法学史に多少ながら成果が見られるものの、やはり多くの場合、大文法家の学説研究が中心であって、学史的な展開を論じたものはあまり見られない。

以上のように、近代における日本語研究の歴史についての研究は、研究史上画期的な体系を打ち立てた研究者に関する研究が、その多くを占めるのであって、その他の研究者については、考察が進んでいるとはいえない状況である。

2. 研究の目的

そこで、本研究では、近代日本語学確立期における日本語学者のひとりで、日本語学総論、日本語文法論、文法史を中心とした日本語史、東北地方の方言研究およびそれらを総合した研究成果を残した、小林好日(東北帝国大学教授、1886-1948)に焦点をあてて、この小林好日の日本語学研究成果の位置づけをおこなうことによって、その学的水準を明らかにし、近代日本語学がどのように確立されてきたのか、その過程の一端を明らかにすることを目的とする。

小林好日は、近代日本語学確立期に東北帝国大学教授として活躍した。上記の研究成果はそれぞれの分野において言及されてきており、近代以降の日本語学の展開に寄与してきた。しかしながら、それらの研究成果が近代日本語学の展開の上で、いかなる意義をもつのかという日本語学史的な意義づけについては、これまで十分に検討されてきていない。本研究においては、東北大学史料館に

保存される卒業論文・原稿・講義ノート類、東北大学国語学研究室に保管される昭和初期の方言調査資料を整理分析し、データベースを作成しながら、小林好日の学問形成の基盤を検討していく。またそれらの資料および公刊された著作を利用して、小林の各分野における研究成果を把握した上で、その成果が日本語研究の展開のなかでどのように位置付けられるかを分析する。また、これらの分析結果は研究会・シンポジウムを開催し、専門家からの知見を得つつ公表する。また、小林好日の残した貴重な資料は、今後の日本語学史研究の重要な資料となりうるので、整理をおこなうなど、今後利用しやすい環境を整えることもおこなう。

3. 研究の方法

(1) 小林好日の研究内容の把握

小林好日の研究業績をふまえると、次の分野について、その研究成果の把握とその意義づけが必要となる。

- ① 日本語文法論における小林好日の研究内容の検討
- ② 日本語史研究における小林好日の研究内容の検討
- ③ 方言研究における小林好日の研究内容の検討

検討する範囲は、近代から現代にかけてとする。とりわけ、小林好日と同時代の研究者との比較をおこなう。また、小林好日の研究には、例えば、ヨーロッパの言語地理学の影響が強く見られるなど、海外の研究への視野の拡大が不可欠である。そこで、当時の海外の研究が、小林好日の研究にどのような影響を与えたかという観点ももつ。そして、検討のための基礎資料として、データベースを作成し、それに基づいて検討を進める。

(2) 小林好日の残した資料の調査・分析

小林好日は、上述のような幅広い分野について研究成果を残しており、東北大学附属図書館・東北大学史料館、および東北大学国語学研究室等にさまざまな資料が所蔵されている。小林の研究内容の把握のための基礎的作業として、これらの小林好日の関係資料を調査する。

① 小林好日の講義ノートの調査・分析

小林好日が当時の学問的状況をどのように把握していたかを明らかにするために、東北大学史料館に残される講義ノート等を整理・分析する。これについては解説付き目録を作成し、後日の利用に

資するようにする。

②昭和初期方言調査資料の整理・分析

小林好日が東北地方の方言調査に着手した背景、および同人の調査の方法を明らかにするために、東北大学国語学研究室で保管する昭和初期方言調査資料について整理・分析する。とくに当時の方言研究・日本語史研究からの影響、利用された通信調査システムの実態について資料を通して明らかにする。

(3)近代日本語学の確立期における学的動向の把握

小林好日の研究成果を日本語学史の展開のなかに位置づけるために、それぞれの分野について、当時の日本語研究の研究動向や、その水準等の把握をおこなう。

4. 研究成果

(1)小林好日旧蔵資料の整理

東北大学史料館に寄贈されている小林好日資料の約130点（原稿・講義ノート・受講ノート・卒業論文・研究ノート等）につき、その資料の分類・整理をおこない、まずは、その基本的な目録を作成し、ついで、資料の整理・内容分析をおこない、より精細な内容をもつデータベースの作成を進めた。

これらの資料の検討から次のような点が明らかになった。すなわち、講義ノートや原稿・書籍（自著）、また各種の研究ノートは、小林好日の研究の姿が見てとれるものであるのと同時に、小林が活躍した時代、すなわち近代国語学の確立期の研究の学的状況を把握するための貴重な資料になるものと考えられる。また、受講ノート・卒業論文は、近代国語学確立期に至る前の時期、すなわち近代国語学の成立から展開期の状況を知る資料となりうるものと思われる。また、同時に小林の受講ノートには、心理学・美学美術史・歴史学等のノートがあり、近代におけるこれらの学問の状況を知るための資料となりうる可能性ももつものである。このような内容をもつ小林好日資料は、国語学を中心とした近代学問の史的展開を明らかにするのに寄与する貴重な資料であると考えられる。なお、この作業は東北大学史料館の協力を得てすすめられた。

その結果は、「東北大学史料館蔵 小林好日（元法文学部教授）旧蔵資料目録（稿）」（科研費報告書『近代日本語学確立期の研究』）としてまとめた。また、同時に、小林好日の近代日本語学上の位置付けの大枠や、東北大

学史料館蔵の資料の位置付けについても、目録の解説としてまとめた。これにより、小林好日の残した資料にどのようなものがあるのかが明らかになり、今後の近代日本語学史研究に資する資料として利用できるようになった。なお、当該資料は、今後、東北大学史料館において公開・閲覧可能になる予定である。

(2)小林好日の近代日本語学確立期における位置付け

①日本語文法論上の位置付け

小林好日の文法論の特色と当該期の文法研究からの影響を検討した。小林好日の口語文法論は、先行の口語文法がもつ特徴を継承している面もあるが、活用形の認め方、品詞の立て方、とくに準助動詞をたてることなどが特徴的な点であることがあきらかになった。そして、活用の認め方などの点から、保科孝一の文法論からの影響が大きいことが判明した。またこのことは、史料館に残された保科孝一の講義の受講ノートからもいえるのではないかと推測される。また、保科以外にも、吉岡郷甫の影響があると考えられる。また、小林の文法論は、体系を組織する記述を指向している文法論であり、山田孝雄・松下大三郎ほど独自なものではないが、理論的・学術的な文法書と位置づけられる。

②日本語史研究上の位置付け

小林好日の文法史研究の特色と当該期の日本語史研究・文法史研究の動向との関係を検討した。小林の文法史研究は、当時確立しつつある状況にあった日本語史研究の動向ときわめて関係深く、確立期の一端を担ったものであるという位置づけをすべきであると考えた。やや詳しく述べれば、小林による日本語史研究、とくに文法史研究は通史を指向するものであった。日本語史研究の蓄積がなければ通史は描きにくい、小林は通史を描いており、通史を描けるだけの研究の蓄積ができあがった時代の研究スタイルであった。このような史的記述のスタイルは、注目すべきものであって、日本語史研究が通史研究としてほぼ形をなすようになる日本語史研究の確立期の一端を担ったものであると位置づけられる。

③方言研究上の位置付け

小林好日の方言学の学史的な位置づけを明らかにするために、昭和10年代における通信分布調査の調査項目について検討し、方言調査資料を整理した上で、一部の項目について現代の方言分布との対比を行い、その間の異同を明らかにするとともに、小林の方言調

査の研究的意義について検討した。このような小林好日の方言研究は、西洋の方言学を十分に消化しそれを日本語方言に適用したものであり、特に言語変化の理論面での貢献が大きいと評価される。3度にわたる東北地方通信調査も、方法論の面で画期的であったと位置づけられる。

(3)近代日本語学確立期の動向

小林好日の研究成果を日本語学史の展開のなかに位置づけるための、当時の日本語研究の研究動向・水準等について把握をおこなった。確立期の動向把握のためには、その前後の期間における学的状況も検討する必要がある。そこで、保科孝一・吉岡郷甫・山田孝雄等の研究がいかなるものであるかを検討した。

とりわけ、小林好日の活躍期の以前から活躍し、また、小林の活躍期にも重なる山田孝雄について、とくに顕著な業績が知られる文法論(山田文法)の分野に絞って、さまざまな側面から学史的意義や現代の研究状況への影響関係について検討した。この内容については、「シンポジウム 山田文法の現代的意義」を開催し(2008年11月29日)、この分野の専門家を招いて議論をおこなった。山田文法が持っているものと持っていないものは何か、現代の文法論の展開にも寄与する点とは何か、さらには、知られざる山田文法の一側面が議論され、山田の文法用語の内実、文法論における単位がいかに把握されてきたか、いかに把握されるべきか等の点についての検討がなされ、山田孝雄の学史的立場付けや現代の研究への影響の理解が深まった。この詳細は、科研費報告書『近代日本語学確立期の研究』にまとめている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 齋藤倫明、言語単位から見た山田文法の組織をめぐって、近代日本語学確立期の研究(科研費報告書)、28-37、2009、無
- ② 大木一夫・田附敏尚・鳴海伸一・安本真弓・佐藤志帆子(編)、東北大学史料館蔵小林好日(元法文学部教授)旧蔵資料目録(稿)、近代日本語学確立期の研究(科研費報告書)、56-107、2009、無

- ③ 大木一夫、口語文法論としての小林好日『標準語法精説』の位置、文芸研究—文芸・言語・思想—、166、12-24、2008、有
- ④ 小林隆、現代方言の正体、図書、693、22-25、2007、無

[学会発表] (計1件)

- ① 齋藤倫明、言語単位から見た山田文法の組織をめぐって、シンポジウム 山田文法の現代的意義、2008年11月29日、東北大学

[図書] (計2件)

- ① 齋藤倫明、(科研費報告書)、近代日本語学確立期の研究、2009、107
- ② 小林隆、岩波書店、シリーズ方言学2 方言の文法、2006、223

[その他]

ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokugogaku/yamada.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 倫明 (SAITO MICHIAKI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20178510

(2) 研究分担者

小林 隆 (KOBAYASHI TAKASHI)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：00161993

大木 一夫 (OKI KAZUO)
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00250647